

勝声出

朱婦し

二度榴

大阪市南区鯉谷中丁

加島屋清助



漢書集解

增補
佐和利集
五編

淨瑠璃 根本鑑

一名 浄瑠璃集

浪華清書堂版



新

目録

- ① 中將服
- ② 金比羅法利生
- ③ 日蓮
- ④ 赤木
- ⑤ 布引
- ⑥ 四ッ谷怪談
- ⑦ 戀女房
- ⑧ 加賀見山
- ⑨ 壁足
- ⑩ 盛衰

豊妻のどん
 百五平伝家持
 勘作伝家持
 大強師のどん
 実盛物語の服
 俣右衛門伝家持
 沓掛村のどん
 霧ヶ岡のどん
 餘別れのどん
 神妻のどん

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
忠	佐	娘	義	新	落	義	蝶	腰	世
以	余	景	士	累	落	士	死	裁	世
孫	曙	清	傳	物	原	忠	形	狀	世
く				張		傳			

道行のどん
 新屋敷の辰
 惣又前内辰
 花菱の辰
 孫儀のどん
 土橋のどん
 佐太村の辰
 お嬢強進の辰
 小阪部難の辰
 泉三帝難の辰

中將姫雪貴殿

クギ

大比ふふとおふて終入
 只又我々妻りあを
 めくふふにふ清まら
 さいふふにふ清まら

湖入の衆ふその名目も
後をこみ大に名に浮る
お刺竹で方内切病者
つるも水が又神ふ流き
あき後又極大樹の時ふ

こころの術末の何こ
倒るゝ安ふ伏柳でふ今
あつた初め通の只往後
うてふまをいせのむ
あもものふくこむあな

いぢめんふたふたの利竹
投擧て得てあやうき

百慶寺家殿

ノドキ

吹礼ふれ被謝といふ所
あはれに迎かまひて

誰あてよまふあかき
はせにまふ徳学をきぬ
まふふひあはれまふ
あはれにまふあはれ
解ふて被謝といふ所

夢をどくからか逢ふ月
たふさくあつたむじこ逢せ
むさくつと何へ百果を果の
連懐乃ほまたなたは夢死
ゆきさあは逢ふと

後沈む海に紀の海を日さ
めあつたてはもやみり
川ありてはもやみり

目道記
勅作後家殿

連て来るこのころ人形
はかたぬきふか夜更の

三
縁ぞん守廻りつて下されと
必ぬのせくたふとこよ
寒よりひる初め陣に
持本もあやえり
亦付投付身ぞの相もく

世の中の人因果もも復か
白れぬあつらの親子まぬ
己の内なる目か二人の
清きいびひ因果人
業人たなう方あれため

一雨にぬる切きつる梅の個のど
あつたむひるほふふふと
連程菊の如く久負う老母
の兒こをえといはまのむら
と押うじをのそと御あや

娘の我子あやうや可也の
老中伏せび整へ浪うは
海を渡りぬのりあふは五
強ぐ如く

おさん
大経師殿

サリ

又うたやほうのやうなより
用徳は洋紙と云ふる白
地の布と見まふかえんが乳
蜜といふぬ孝の思ふ
程ふ二箇のいさめをて解

やぬ物の板極席下には
巨元寺の田舎つとてあや
かたまの雲(別)が病もさげ
えあまをかろしめとあや
あはるの角玉がみの森の

びやうぶ

ぼん庵園と拝遊をいふ書

甘き藤雨ふらりやうと記す

布引

寒風お供の段

狂ついでわすれたおろひ

お月夜

の山園某社の曲げもかく

あふかかれらふはさふら

権と投をて移るやうに

ゆきふらるる老とある

追ふとふて移るふたの甘

ことばは方白の歌

ふと棄れどひねりて
ばしう恥めあふも花の
れあつてつてものぞん
まはつてとかの念あや白
幾平が海へ末代まで
源

氏へ慣れ本が今に
どと白簀持る村で海へ
えふと切落しあはれ
恥に勝てし體は法あけ
並つてあつては白簀

法を^{めう}世に^し現^{げん}と^あ慕^ほひるを

慕^ほひ流^{りゅう}を^かあ^がら^うふ^びん^を

法^{はう}文^{ぶん}の^を様^{よう}

の各様法
修業の経家設

クミキ

か^んも^も從^{しゆ}ふ^ふ其^し上^{じやう}之^の上^{じやう}の^か禁^{きん}

か^ん居^いる^る身^みの^の結^{けつ}の^の中^{ちゆう}に^も

連^{れん}綿^{めん}を^を方^{はう}切^きに^にふ^ふい^いせ^せれ

乃^の分^{ぶん}れ^れど^ど前^{ぜん}に^に糸^{いと}を^をさ

糸^{いと}と^と濯^{じやく}は^はひ^ひれ^れ糸^{いと}は^はひ^ひる^るを

研^{けん}ぐ^ぐ糸^{いと}を^を撚^{ねん}て^て月^{げつ}の^のま^まを

かろがみき先のほくとも
おぬいのけり乳母成
くと未鑑鑑も清く澄
後の日はいふ事ある

やいん
病国乃殿

抜文

お多れ甘中つる事ある
尾上れあつていのか病れ
お災いあり強ひ野じか後
えいかり煙たれとある
あそびあめが氣にさる

とと先々海さかゆきといふ
えれはほども物いふあまふ
かたの海にふひむきほ
海はあさといふもの種は
我方もほてりたきふれ

かともお運教ふたの

建勝別乃段

サハリ

まの初め初めも付海に
かの力にふまふは
係抜てはまふあまふ

又ぬが流海傍になつた果て
あつた
 参るは後を果白川の
あつた
 津興ふる海より人々の余
あつた
 主祿くのれ事死ても
あつた
 垂まぬと伏せしむふ並
あつた

是のちふれぬ
あつた

神清乃生人
あつた

サリ

是程のちふれぬ
あつた

是のちふれぬ
あつた

是のちふれぬ
あつた

むらん うれ つけ ト ぎ
我々の種で実いたるく自生
心の種もかきよの中山に
のりい満れとてひ徳を
我々力いそあ種と種と
かきよふもさふ金ふもさふ

むらん
心で我々種は世に
恒ふさふもさふ金ふもさふ
墜獄の業とくたへふ
太さあ海家提方金
平あめさる種と金

トク
えいようちこうぞく

面々紅梅の死にちうくん

も髪も^{つみ}ま^つう柄持^つも

分も^つあ^つは洗^つふおん^つとあ

わ^つる^つ二階^つの^つ漆子^つ付^つも

生^つ金^つ髪^つに^つ二言^つあ^つら^つと



くと^つ投^つ出^つて^つ海^つ山^つ嵐^つの

死^つあ^つら^つり^つと^つ如^つく^つも^つあ^つに^つま

四^つこ^つふ^つあ^つも^つい^つあ^つり^つ現^つわ

あ^つら^つう^つあ^つぬ^つが^つげ^つれ^つあ^つだ^つも

忘れ^つぬ^つくと^つ妹^つい^つや^つと^つい^つや

換ひ集ふもそりけり
 三首あもむみふふはひ
 後つらのひ金と押敷く
 いさゝさんで
 まるやく

忠臣藏

乃行

母めさる金と換へて
 ちつ子川字のたて
 ふうまはもふふ井川の
 流れ人んたのたて
 日づの紅葉及び付て

来て小男麻の丈取をい給
ふ事おもしろいものをい
手拍の裏あはて人の中い
うて祿々々々んや祿ん
祿のやういさこの何雨さ

あれこそ人お遠て恨で何
とまあさきてよりふとあな
徳田のうまいし我方のよ
めこそふ人あさこの橋を
けいさ田やあ坂の橋を

越えりて廻りて結ぶはあき
あきなる春の日の光ふえ
あきなる春の日の光ふえ
あきなる春の日の光ふえ
あきなる春の日の光ふえ
あきなる春の日の光ふえ

あきなる春の日の光ふえ
あきなる春の日の光ふえ
あきなる春の日の光ふえ
あきなる春の日の光ふえ
あきなる春の日の光ふえ
あきなる春の日の光ふえ

あらさう 一 ありと 一 ありと 一 ありと
あらふらんがて幾箇の社
われさよ七箇のしに慨
わけて寝ひやに掃てさう
揖さきいもはういさう
わが親類とよもつるい小次

ふけてとてきももてとねう
ねえぐんと母うき
もつるわきふさ
ねえのさものわえ
聖地ふさむら

めづま

あとの別き乃 強治のもてれ

猪麻とあひの古あめり

あつちのふいひやと

いづるゆで大いやはと

と我々と換つさうへに

とてやそ大津や二井との

禁を都て山科へ入る

あつち

新産鋪乃殿

マクラ

あつちの流るの流る

新屋敷に住まふこと
 好ふゆゑにわんと此
 とのじきれも惟故
 床のゑも分ちあつむ

五虎将家説

サリ

始は虎が宿に居る
 小まの款より徳る国
 たりとて想てよう
 何びほの神もく
 源小次郎とて入

毎夜ごとくくはらばれども
ぬいせとのむねのむねのむね
て應にんを今と情とのめ
くとお余とふか私とやと
あそとのあそとせぬあそ

三人は人をさるかにまぬ
中か並人の男とやとせぬ
人か参りましてつゆとせぬ
あそふふん中かとせぬ
あそふふんあそふとせぬ

お多の持君もろおこれ中
娘の母に付風は付あふ
のろろお人おれさうで
ゆきあふあふのふせうと
紅白楊元結紙くしは

お手付る中よのほろ
おそおん付とあふのほ
おかろろおれおれや
おそおんの杖もたかき
おそおんおれおれや
おそおんおれおれや

とんち福にまの毒何いそ
 常夜よりあきさるる
 の元さるう勝別がねて
 うわりの十年の極めを年
 めせ又年々々と勝別を

異ふりも悲いさひも
まぬきふりもぬく
人にもぬく西の海
とそこをぬき

義士傳
操波のめん
クトキ

かゝる諸君は上へある
あつたは福國をなす
あつたは福國をなす
いじり男に死なせといふ
世の故ひはあつたの國

あつたは福國をなす
あつたは福國をなす
あつたは福國をなす
あつたは福國をなす
あつたは福國をなす

五

血はたふれて流れて

あづき麻糸割かき針

新
勿
之
祿

土橋

廿六
日

司
 其後ちの五いと一ふと一きと一き

世に於て多き人多し

卷之八

ひか
こび
やま

小都の娘とあひぢ

多岐の川にあり

雅えみわなをいづ人も

をまの紙より作らる

六

菅原

三酸目

ノトキ

甘き方と楚て赤い舌
の味は現まれの味
相れの流れぬまそふ
切抜ひいそまてい

あはれ

おぬれつて孝のそと
相れはもふれまふ
むつはれはまふ
のれはむつはれ
かたこや甘き味

後集あつてまゝあつていふ
秋の日は後集あつていふ
もふふふふふふふふふ
好人ふふふふふふふふ
あつてはのふふふふふ

（おれ）

秋の日は後集あつていふ
後集あつていふふふふ
後集あつていふふふふ
後集あつていふふふふ
後集あつていふふふふ

つぎのうらごころ
あまがうせ 継柳子のササ

か彼ふまごころからる友アイ

万人 ^{てくさう} 死うよと去る手

柳子 ^{うめ} 柳ふま味方ふ秋

とあふ柳子ふるびて勢

つぎのうらごころ

もあふまごころとてさう

柳て柳ふま味方ふ秋

の柳てもあふまごころ

あふまごころとてさう

目とて柳て人ごとさう

此の下部付録に記す
また秋の行末もあつた
後れよりまた運命や
新果の果をばて
やうに前にもまた
やうに前にもまた



師のふりせし
かれをばてか
この師業の
血氣のまゝ
残るゝと

優美なる妻の如く
おとめや切やふひのま
あまの首も紅いふは
まきの種のもみ入味方
怪我もかくぬきふ耀く



身も光るふくむは
て優も深し相ひふは
おとめや切やふひのま
あまの首も紅いふは
まきの種のもみ入味方
怪我もかくぬきふ耀く

参りて候に付て候

蝶花形

ハ目々キ

百二十穴状の何表を奈
傳老ふもいよのふさう
電の線やの乱れけ歸



其上之線やのふさう
授てある父の身軀車も
秋ふらまふといふ
参りて候に付て候
のふさうとすふさうと

妹はまに命より後清の姉
れあり神ありかたはるも先
の世の約束のいと清めても
えかひいさそ殺して目
もうとて父を國に母の妻

（おし）

別神も仏もあつたせうとて
かひに姉妹がぬく中
家もかたがちもあつた
まにまにものもあつた
あつた国もあつた

食料をばしにせよと云ふも

わゑる方々清まへはあま

実の清くお事をた秋や

後と師ぬん

腰越状
三股目

マコ



内と世のくす物ゆう

きて軍師も今も候希

のえふ并橋らう付

国史師ゆてもさる希と

夷る親に分るすの病にも

あは
 此の体たれ人形やうぞ
 あてうにうにうにうに
 うづつめあまそが
 後人のうやうやう
 るもじりるもけりる

明治三十六年八月二十日印刷
 公 年八月廿七日發行

大阪市東区北久太郎町三丁目
 五十六番屋敷

編輯兼
 節者

鶴澤勝右衛門

不許
 複製

發行兼
 印刷者

大阪市南区鯉谷中之丁

加島屋清助

版
 印

